

新晃工業

HP空調機が飛躍の10年間

セントラル方式含め 東京再開発が市場焦点に



鈴木 元 部長



高田 啓介 課長代理

空調機器の総合メーカーでありエアハンドリングユニットでは業界最大

手を誇る新晃工業(社長 武田昇三氏、本社・大阪市北区南森町1-4-5)。同社にとっての最近10年間は、市場の空調機に対する省エネ性・環境性要求に、新製品・新技術の提案し続けた時期であり、特にヒートポンプ(HP)空調機についてはバリエーション、性能が飛躍的に拡大・向上した。国内市場の今後10年をみれば、五輪開催を控える東京地区の都市再開発の増加など、一般空調分野での空調機需要拡大が控え、また新築建築物(非住宅)でのネット・ゼロエネルギービルディング化の対応期限が刻一刻と迫る中で、高付加価値製品提案による需要獲得が焦点となる。

支社の鈴木元・営業開発第一部長は「もともと『ヒートポンプバック』は00年頃に製品化し販売を始めていた。その後、設備設計業界では、建物規模にもよるが、チャージ指向が強まったことから(チリングユニットを使う一般的な)空調機と同程度にはバリエーションを増やそうというこ

とになり、08年に大幅にラインアップを拡充し「ヒートポンプバック」の現行ラインアップは、空調機本体が「標準型」で5タイプ、コンパクト型「4タイプの合計9タイプ、室外機(熱源機)が4馬力相当から24馬力相当まで12タイプを用意。また全外気システムか外気混合システムのいずれかを制御プランとして選択可能であるほか、同社の一般的な空調機と同様に調湿、除塵などのツールは一連の取り揃えなど用途に応じて最適な組み合わせを選べる。設備設計業界で直膨工アハンの指向が強まりつつある中でバリエーション拡充策は奏功し、急角度で市場に浸透したが、このスピードをさらにもう一段引き上げたのが11年3月の東日本大震災後の省エネ・節電・省電力ニーズだという。一般空調向けの当社空調機販売では「ヒートポンプバック」の構成比はかなり高まっている。導入先の建物用途は、小規模な事務所ビルやホテル、病院、学校の外気処理で採用されることが多い。最近では工場空調で採用されてきている(同社東京支社の高田啓介・営業開発第一部長代理)。

「当然ながら主方のセントラル方式だけでなく、『ヒートポンプバック』の重要な導入先であり、情報のキャッチと提案内容のフラッシュアップにもう一段注力していく」と鈴木部長は締めくくった。

05年から今日までの10年間で同社が世に送り出した新製品は数多いが、特に象徴的なものとしては、ヒートポンプ空調機「ヒートポンプバック」の新シリーズ(08年)、環境の未来を考慮した低炭素社会構築に向けた次世代空調機の新コンセプト「Smart AHU(スマートAHU)」(13年)、病院・介護施設向け空調機「外気処理機」「クリーンキューブ」(同)、コンパクト型デシカント空調機「AJ-SD型」(同)等が挙げられる。

このうち「ヒートポンプバック」は、冷凍サイクルを搭載した所謂「直膨エアハン」。同社東京